

Vol. 176

2018.3.15

理事長トーク Top Interview

第12回 看護・リハビリテーション研究会

医療法人社団 健育会 理事長 竹川節男



2018年3月10日（土）、東京コンファレンスセンター・品川において第12回看護・リハビリテーション研究会が行われました。



この研究会は、各病院・施設のセラピストと看護師がそれぞれチーム単位で研究テーマを選定し、1年を通じて研究した成果を学会形式で発表する場で、「医療専門職は、論理的思考・統計的な視点を身につけた科学者であるべきである」との考えから毎年開催しており、今年で12回目となりました。

まず初めに、群馬県沼田市を中心に活躍する、医療法人大誠会・社会福祉法人久仁会理事長／群馬県認知症疾患医療センター 内田病院センター長 田中 志子先生をお招きし、「地域包括ケアシステムと認知症」という特別講演を賜りました。





ご講演の中では、「認知症のケアは BPSD (Behavioral and Psychological Symptoms of Dementia : 認知症の行動と心理症状) を作らないケアと環境を提供し、その人の持つ能力を安心して発揮して、褒められる場所を提供することである」というお考えをベースにした様々な認知症ケアの事例やコツをご紹介いただきました。また「BPSDを減らすことが、ひいてはケアする立場の人間の仕事を減らし、仕事の効率がよくなることに繋がる」という視点は、私たちの仕事においても積極的に実践すべきであると感じました。

また、田中先生は群馬県沼田市の中に病院施設を中心とした市の活性化にも取り組まれているとのお話で、地域包括ケアのモデル地域であると同時に、健育会グループの中でも、これから過疎化がますます進んでいくであろう西伊豆地区、いわき地区、花川地区などにおいて、我々の病院/施設が中心となって町おこしをしていくことができる可能性を感じました。ぜひ、対象の病院・施設の職員の皆さんは、今回の講演を参考にして、これから活動してほしいと思います。



講演の後は昼食休憩を挟み、看護部門7演題、リハビリテーション部門8演題、合わせて全15演題の研究結果が発表されました。

看護部門 研究発表

座長：横浜市立大学 医学部看護学科老年看護学 教授 叶谷 由佳 先生



1

**外出支援に関する
医療療養病棟職員の意識調査**
竹川病院 森高 芳美

2

**看護師の経験年数・キャリアと
転倒転落予防に対する観察・判断の違い**
西伊豆健育会病院 相馬 葉子

3

**患者の表皮剥離の要因
- ADLとの関連について -**
熱川温泉病院 石田 みな子

4

**療養病床に勤務する看護補助者の
ターミナルケア態度に影響する要因**
石巻健育会病院 西條 さおり

5

**転倒転落カンファレンスが
看護師の意識と行動に及ぼす変化**
いわき湯本病院 渡邊 静

6

**FIM『トイレ動作』確立に着目した
トイレ動作介入プログラム指標の検証**
ねりま健育会病院 岡田 美久

7

**退院後訪問の経験が病棟看護師の
退院支援の視点に及ぼす影響**
花川病院 濱野 幸枝



リハビリテーション部門 研究発表

座長：ねりま健育会病院 院長 酒向 正春 先生



1

**当院入院患者における
ブリッジ力とADLの関連性**
いわき湯本病院 石川 大成

2

**大腿骨近位部骨折リハビリテーション
介入初日平行棒内歩行評価の有用性について**
西伊豆健育会病院 山口 良平

3

**高齢者の非特異的腰痛と
身体機能との関係性について**
熱川温泉病院 谷口 徹

4

**脳卒中後重症上肢麻痺に対する
新しい治療戦略**
ねりま健育会病院 飯塚 徳彦

5

**視覚と身体図式の誤差
健常者と脳卒中患者の傾向と違いについて**
石巻健育会病院 齋藤 大地

6

**身体的フレイル患者の
在院日数に関連する因子の検討**
石川島記念病院 斗澤 咲季

7

**部分免荷による平地歩行と
トレッドミル歩行が大腿骨近位部
骨折患者の歩行に与える影響**
花川病院 柚原 千穂

8

**同居家族の介助可否に着目した
回復期リハビリテーション病棟における
転帰先に関わる因子の検討**
竹川病院 佐藤 圭一郎





看護部門の座長を務めていただいた叶谷先生からは、

「今年も、患者さんに回復していただきたいという視点で真摯にケアに取り組んだからこそその研究となっており、現場において大切なことをまとめていただいたと感じています。前回、研究は継続していくことが大事なので、テーマを変えずに研究を蓄積していくという考え方でもいいんですよ、というお話をさせていただき、今回は1演題ですが1年半という長期に渡った研究もございました。皆さんがそれぞれの病棟で悩んでいることは、日本全国の病棟でも同じように直面している悩みだと思います。ぜひ研究で得られた知見を外部の学会でも発表し、悩みを抱える病院同士でディスカッションをし、高めながら知見を共有していけるよう、頑張っ

てほしいと考えています。」という、今後への期待を含めた講評をいただきました。



また、リハビリテーション部門の座長を務めていただいた酒向先生からは、

「発表されたリハ部門の皆さんは今日の発表を、どの学会に発表されることを念頭に考えておられているでしょうか。私は本日、日本リハビリテーション学会や脳卒中学会、PT・OT・ST学会を念頭に、研究発表を聞いていました。去年に続いて、ますますリハビリ部門の皆さんの研究内容、そして発表する力が伸びてきていると感じています。研究の成果をどの学会で勝負するのか、どの雑誌で論文を書くかということ念頭に、さらに日々研究活動を進めていただきたいと思います。」という講評をいただきました。私も健育会グループからどんどんメインの学会で勝負できる演題が増えていくことを期待しています。



最後に私から、以下のような話をしました。

「看護研究、リハビリ研究ともに非常に先行研究をよく勉強しており、研究内容の深さについては多少病院によって差があるように感じましたが、発表の形については良くできていたと思います。せっかく良いテーマをあげているので、2年以上続けて同じテーマに取り組むなど、フォローアップ研究に積極的に取り組んでほしいと考えています。研究というのはチームで取り組むものですが、前任者の研究を引き継いでさらに深く突き詰めていくような研究に来年は期待したいと思います。

また、私が気になったのは皆さんの発表を聞いていて、研究としての形は整っているのですが、そこから研究心や探究心、平たく言えば「悩んでいる気持ち」がなかなか伝わってこないのが気になりました。研究の根底は、「なぜこのようになるのか？」という疑問です。研究という形にこだわるころはあると思いますが、研究心というものが根本にあって、そこから研究を行っていくことが素晴らしい研究に繋がっていくと思いますので、そのような気持ちも大切にしてほしいと思います。

最後に、看護部門/リハビリ部門とも限られた人数で、毎日多くの患者さんに治療やケアを行いながら、これだけの研究を行い、発表という形でまとめている皆さんを私は誇りに思います。さらなる進化を期待しています。」



今回の看護・リハビリテーション研究会は、開催前にアップした理事長トークvol.175において「フロアからの質問に期待したい」と言ったことをしっかりと受けて、質疑応答における質問も議論を深める良い内容が増え、質の高い研究会となったと感じました。これから、座長の先生方からのアドバイスをしっかりと取り入れていくことで、さらに充実した研究に繋がっていくと思います。研究の成果を積極的に外部の学会に発表することを念頭に、来年の第13回看護・リハビリテーション研究会でさらに良い研究が発表されることを楽しみにしています。

